

あの夜、宇宙が見えました

星よりも、 遠くへ

震災の日の星空と被災者との繋がりを描いた プラネタリウム版ドキュメンタリー

制作 仙台市天文台

東日本大震災の夜、 大停電の被災地を満天の星が照らしていた。

こんな星空を今まで見たことがない…

予想だにしない苦難とともに被災者たちが見上げたのは星空という名の「宇宙」だった—

ストーリー

「星空」ってなんだろう？

光を失った夜、いっせいに輝きを増した夜空の星たち。
これまでは見えていなかった星の光……
どうしてこんな夜に？
不安と喪失の夜の底で人は思う。

人は死んだら何処へいくの？

この惑星に生き、あわただしく去っていった、あなた。
明るく輝く星は、大切なあなたが生きた証。
あなたとの眩しい思い出。
星の世界では、一瞬が永遠となる。

星空は、人生の輝きに溢れている。
たったひとつで輝く星がないように、
そこには、寄り添う人がいる。見つめる人がいる。

この惑星もまた生きています。
その強い鼓動は、時に天地の境を曖昧にする。

「星空」ってなんだろう？「人生」ってなんだろう？
星空とともに生きることは、人生にどんな意味があるのだろうか？

もしも、星よりも遠い場所へ飛んで行けたら、
その答えは見つかるかもしれない。

星を見た人

越後谷出（宮城県仙台市）

仙台市在住のカメラマン。震災当日、大停電の仙台市内で星空を撮影。

今野初美（宮城県石巻市）

津波で最愛の娘と孫を失う。失意の中、新聞の投稿欄を目にした事がきっかけで、星空との対話を始める。

阿部任（宮城県石巻市）

「星がきれいでした」—倒壊した家屋の中で、星を見つめて過ごした9日間。時が過ぎ、震災との向き合い方に変化が生じる。

佐々木米子（宮城県南三陸町）

避難所となった旭ヶ丘コミュニティセンターでは震災川柳が流行。センターの庭から見える星々に南三陸の人々の姿を重ねる。

及川克政（岩手県陸前高田市）

「波になって、ママにあいたい」—亡き母の面影を追う2人の息子。家族を繋いだのは夜空の星だった。

ある消防士（宮城県仙台市）

過酷な救助の現実。満天の星に価値観が変化する。

岡崎伸郎（宮城県仙台市）

仙台市内の病院に勤務する精神科医。震災の夜に星を見たことをきっかけに「星降る震災の夜に」を執筆。

<制作のきっかけ>

仙台市天文台は、震災の経験から、被災地の博物館として震災とどのように向き合うべきか、繰り返し考えてきました。そして、震災の象徴にもなっていた“星空”を被災者の手記とともに残し、伝えていく取り組みとして、プラネタリウム番組「星空とともに」を制作し、2012年3月に公開しました。その後、この番組は反響を呼び、現在では全国の多くのプラネタリウム施設で放映されています。

本作、「星よりも、遠くへ」は、「星空とともに」の第二章となるプラネタリウム番組です。震災から時が過ぎ、被災地の状況や被災者の気持ちに変化する中で、第一章では伝えきれなかった星空がありました。より多くの方にその星空をご覧いただき、震災や自然と向き合うきっかけにして頂ければ幸いです。

なお、本作はクラウドファンディングによって制作資金を集め誕生した作品です。ご支援いただいた多くの皆さまに改めて御礼を申し上げます。

最後に、東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りするとともに、すべての被災者の皆さまに幸せな未来が訪れることをお祈りいたします。